

「僕は何人？」

福岡県 筑紫野市立筑紫野南中学校 2年
垣内 隆泰（かきうち りゅうた）

僕の父は中国人で、母は日本人です。父と母は日本で出会い、僕と双子の妹は日本で生まれました。僕たち家族はそのまま日本で暮らす予定でしたが、中国の祖父と祖母が度々僕と妹に会いに行きたいというので、僕たちが二歳になる前に中国に移りました。

僕たちは幼稚園から日本人学校ではなく、周りの中国人の子どもたちと一緒に現地の幼稚園、小学校に通いました。幼稚園のときは、僕たちが中国人と日本人のハーフであることで、差別を受けることはありませんでしたが、小学校に入学すると、僕たちは「日本鬼子」という言葉を数人のクラスメイトから浴びせられました。「日本鬼子」とは、日本人のことを指す差別用語です。僕と妹が通った小学校は一年生から六年生までクラス替えがなかったので、ずっと同じクラスメイトでした。僕たちはその中でじっと耐えて生活するしかありませんでした。学校で問題が起こったときは父が先生と話し合い、解決してくれました。しかし、転入生が入ってくると、また同じことが繰り返されました。

このことについて母は、「それは昔、日本が中国に対して行ったことを考えると、仕方がないことかもしれない。」「だからこそ、初めて日本人に会った中国人のクラスメイトに、どうしたら自分たちを理解してもらえるか、きちんと考えて行動することが大切だ。」と教えてくれました。

母はまさに自らその手本を僕たちに示してくれました。母は中国語を話せませんでした。挨拶程度の言葉を覚え、いつも笑顔で周りの中国人と接していました。挨拶の後の会話はほとんど意味が分かっていなかったにもかかわらず、嫌な顔もせず、ずっと笑顔で話を聞いていました。中国では体育祭などの学校行事は日本とは違い、生徒と保護者が一緒になって準備や片付けを行っていました。母はそんな行事にも率先して参加し、言葉も分からないのに一人で黙々と作業をしていました。

母は行事ごとに度々学校に来るので、次第にクラスメイトとも顔なじみとなり、クラスメイトたちも自分たちの知っている日本語を母に聞いてもらおうと母に話しかけるようになりました。母はいつもの笑顔で覚えてたての中国語を使い、「凄いね！」と言ってクラスメイトたちを褒めていました。母とクラスメイトたちの心の距離は少しずつ近くなっていき、学校行事の準備などで母が学校に来たときには、日本人を嫌っていたクラスメイトさえもだんだん、母と一緒に作業をするようになっていきました。

僕は中国語が話せるのに周りとの距離をとっていたのに対して、母は中国語が話せないのに母の周りにはクラスメイトたちが集まってきました。そして保護者も母に声をかけてくれるようになっていきました。母は僕に「真面目に接していれば、相手はいつか分かってくれるから。」と言いました。その言葉を信じ、諦めずに周りへと接し続けると、それまで「日本鬼子」と言ったり、嫌がらせをしたりしていたクラスメイトたちは小学校三年生になる頃には僕たちのことを認め、僕たちも少しずつ周りへと馴染めるようになりました。五年生になる頃には問題が起きても自分たちの力で解決できるようになっていました。

五年生の冬休みを利用して日本へ一時帰国しているとき、世界中に新型コロナウイルスの感染が広がりました。中国に入国できない状況が続き、僕たちは日本の小学校に通うことになりました。四年生の冬休みのときにも日本に来て、そのとき体験学習として日本の小学校に通った経験があったので少しは知っている友達もいましたが、いざ、転入するとなると、一年前は優しかった友達も話をしてくれず、中には差別的に僕たちのことを「中国人」と言ってくる人さえいました。中国にいるときには「日本人」と言われ、日本にいるときには「中国人」と言われ、自分は一体何人なのか、自分の母国や自分の居場所はどこなのか分からなくなりました。

そのことを母に話すと「ごめん。」と僕に謝り、それに続けて「あなたは日本人でもあり、中国人でもある。そのことを恥じることなく、誇りに思ってもらいたい。」「既に二か国語が話せて、これから英語も話せるようになったら、将来自分は何をしたいのか日本と中国だけではなく、その選択肢を世界に広げることができる。」「今はその将来のための準備期間だと思って乗り越えてほしい。」「中国のことを快く思っていない友達も心から接していけば、時間はかかるかもしれないけれど、いつかは分か

ってくれると思うから。」と話してくれました。

僕の心はまだ複雑ですが、時間とともに母の言ったことを本当に理解して、受け止められる日が来ると信じています。その日が来るまで、僕は僕であることに自信をもって前に進んでいきたいと思っています。